

『県警対組織暴力』

1975 年／日本／深作欣二監督作品

全員悪人。一番悪いのは誰なのか？

会員 金川 裕紀 (63 期)



はじめに

この原稿の依頼を受けたすぐ後に、菅原文太氏が亡くなった。私の大好きな「仁義なき戦い」シリーズ（以下「仁義なき」）で主人公広能昌三を演じたスターなので、何としても文太氏の作品を書きたいと思った。

「仁義なき」は、戦後の広島ヤクザ社会において、私利私欲のために抗争を繰り広げる幹部たちとその波にもまれて散っていく若者たちを描いた群像劇である。任侠映画と異なりヤクザを美化しておらず、ヤクザ映画だと敬遠している方々には是非見ていただきたい。

文太氏、深作欣二監督をはじめ、脚本笠原和夫氏、松方弘樹氏、梅宮辰夫氏などの「仁義なき」のスタッフ・キャスト陣をほとんど引き継いでいる本作を紹介する。

制作の経緯

「仁義なき」以降ヤクザ映画をヒットさせていた東映が当局が快く思わず、東映本社が家宅搜索される騒ぎとなり、予定されていた映画の製作を断念することとなった。そんな中、東映社長が当局の圧力に対抗するために制作したのが本作であり、当局に反発する思いを込めてこのタイトルを付けたそうである。

タイトルでは警察がヤクザと戦うように見えるが、警察とヤクザの癒着を描いた内容であり、警察あるいは権力批判の作品である。

こんな制作に至る背景事情も合わせて見ると一層面白い。

悪対悪

「県警対組織暴力」とは、警察対ヤクザではなく、警察上層部と大手ヤクザ対警察末端と地元ヤクザの対立である。

警察とヤクザの宴会や、警察車両をタクシー代わりに使うヤクザ。警察からヤクザへの天下り（?）、警察が政治家や対立ヤクザと組んで反対勢力を一掃などなど、誰が善などではなく、すべてが悪である。

悪役ぞろいの俳優陣

「仁義なき」から引き続き見ると、警察もヤクザも一緒

だろ、と言わんばかりのキャスティングも面白い。「仁義なき」で主役のヤクザを演じていた文太氏が主人公の警察官である。ヤクザを恐喝し、殴り込みに送り出すシーンから始まる。まったくもって警察は善ではなく、警察もヤクザも同じ部類として描かれている。

エリート警官役は「仁義なき」で二役を演じた梅宮辰夫氏で、一見まじめで誠実そうに見えるが、非常に腹黒く、事件終結後ヤクザの関連企業に栄転し、最後は元気にラジオ体操（これは見なければ分からない）。

さらに政治家に金子信雄氏など、主要なキャストが「仁義なき」の名悪役に固められている。

音楽

「仁義なき」の面白さを何倍にもしているのが音楽だ。導入部分のナレーションとともに流れる有名な音楽で一気にその世界に入り込み、事件が起こるたびに鳴り響くインパクトのある音楽で臨場感が増す。そんな音楽が本作品でもインパクトを残す。

さらに本作では、最後の立てこもりへと続く殺人事件のBGMが「こんにちば赤ちゃん」という何とも穏やかな音楽というのも面白い。

その他

他にも、文太氏と松方氏の友情、超暴行取り調べを受ける川谷拓三氏（もはや伝説）、田中邦衛氏の女役、松方氏の怪演など、見どころ盛りだくさんだが、それが100分に凝縮されている。私の文章では全体像がまったく伝わっていないが、比較的短い作品なので、是非見ていただきたい。

最後に

本誌にヤクザ映画を紹介することにご批判も多いと思うが、深作監督の独特の臨場感あふれる描写などまぎれもない名作であり、この映画を知らない方々に見てもらう機会があればと思い、紹介させていただいた。刑事手続に関する法律は度外視で楽しんでいただきたい。